

[報告] 第 20 回歴史地震研究会参加記

東京大学地震研究所* 行谷 佑一 (なめがや ゆういち)

§ 1. はじめに

平成十五年は近年稀にみる冷夏の年であった。この涼さで影響を受けた方々には大変申し訳ないが、暑い筈の夏を快適に過ごせたように思う。そんな中、第二十回歴史地震研究発表会が九月五日から三日間にわたり千葉県で開催された。というのも、本年(2003)は関東南部を襲った元禄地震(1703)から丁度 300 年という節目の年であり、千葉県はとりわけ被害が大きかったからである。なお、三日間のうち一日目は佐倉市の国立歴史民俗博物館、二日目は元禄地震津波で被害の大きかった九十九里町の中央公民館において研究発表会が開催され、三日目は千葉県外房を巡検した次第である。また、二日目の午後には市民講演会も開催された。

ところで、私は今回初めて歴史地震研究発表会に参加させて頂いた。参加された皆様が「歴史地震」という共通の研究対象をお持ちであるものの、実はそれぞれの専門は全く異なっており、そのため、様々な議論が行き交い、大変実り豊かな研究会であった。そこで、以下にこの三日間の概要を報告する。

§ 2. 歴史地震研究発表会・市民講演会に参加して

一日目は歴史地震・津波の研究発表会であった。その発表の内容は、津波堆積物、数値シミュレーション、トレンチ調査報告、歴史史料の紹介、歴史地震の震度規模検討... などなど全く多岐に亘り、それを個々にまとめる事は紙面の関係上無理である(これについては、講演要旨集をご覧いただきたい)。その後、二日目の開催地である九十九里町にバスで移動した。

国立歴史民俗博物館で特別展「ドキュメント災害史」が同時に開かれており、昼休みに北原糸子先生の先導で見学した。ここでは、津波碑の展示や、「島原大変肥後迷惑」の有様が数値シミュレーションで再現され、大変興味深く時間が足りないほどであった。

二日目の午前は引き続き研究発表会が行われた。やはり多岐に亘る発表会であったが、中でも 1946 年南海地震による徳島市の被害が少なかったのは前年に大空襲を受けたためである、という発表は目から鱗が落ちた気持ちになった。

今回発表会に出席することで色々なテーマやアプローチ法を知ることができて大変勉強になった。また

様々な分野で活躍なさる方々から貴重なアドバイスを頂くことができ、まさに異なる観点が集う歴史地震研究会の「うま味」を味わえたと思う。こういう研究会は他にあまり無いのではないか。ありがたい事である。

二日目の午後は、九十九里町公民館において伊藤和明氏の司会で市民講演会が行われた。題目としては「外房における元禄地震津波碑について」(古山豊氏)・「房総半島の地震活動」(岡田義光氏)・「九十九里海岸を襲った延宝 5 年(1677)、元禄 16 年(1703)地震津波に学ぶ」(都司嘉宣氏)・「千葉県の地震防災」(浅尾一巳氏)の 4 目であり、どれも非常に興味深く有益なお話であった。最後に講演された浅尾氏(千葉県総務部)は、兵庫県南部地震による震災の教訓を持つ、神戸消防局の経験談を紹介して下さい、その中に「同時多発火災に対して、消防局が処理できるのは十件が限度」というお話があった。災害時には住民同士の協力が大事であるとのこと。これは、「結局自分達の村は自分達で守るのだ」と語られた山下文男氏の講演とつながり、大変印象的であった。

そして、宿泊地である「国民宿舎サンライズ九十九里」に戻り、村上仁士先生が議長のもとで、歴史地震研究会総会が開かれ、都司先生が会長として再選された。こういった総会も初めての出席だったのであるが、話される議題が重要でかつ的確な内容であり、皆様真剣に議論をなさっていた。実り豊かな研究会が滞りなく開かれるのも、こういった話し合いがあつてこそだな、と改めて思ったのである。

§ 3. 巡検に参加して

三日目は一日中巡検の日であった。朝 8:30、バスは宿泊地を出発し、まずは九十九里町真亀にある浄泰寺に向かった。浄泰寺では元禄地震津波の津浪碑を見学したのだが、保存状態が良好で石碑に書いてある文字(津浪精霊有無縁万霊)をはっきりと読むことができた。なお、浄泰寺は海岸から約 2km の所にあるが、寺の軒下に貝殻がたくさんあるのが目立つ。この貝殻は元禄津波によるものかと思わせる。実は、私は都司先生と昨年(2002)九十九里の津浪碑を見学した際に、同様の貝殻がほかの寺にもあることを発見していた。その貝殻の分布を海岸に垂直に追いかければ、津波の遡上高がわかるのではと思いを

* 〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

実行したのであるが、海岸からどこまで遠のいても貝殻がなくなる。どうやら貝殻は津波によるものではないらしいという結論に達したのであった。

次に大網白里町北今泉にある等覚寺に移動した。浄泰寺からはバスで10分くらいのところであった。そこでの津波碑には町の教育委員会による案内説明版が立てられていて、等覚寺周辺では元禄津波により63名の方が亡くなり、この津波碑はその十三回忌に建てられたものである、と説明されている。

そして、等覚寺をあとに我々は天津小湊町にある誕生寺に向かった。等覚寺から誕生寺までのバスの間、永井九一氏が元禄の津波による被害の詳細やその土地に纏わるエピソードを紹介して下さった。中でも、「昔紀州から漁業の技術士が安房に移住し、漁の道具を置いた納屋が多くあったから『納屋』という地名が多い」や「元禄の頃になると納屋で暮らす人も増え始めたため元禄津波の犠牲者が多くなった」、という話は興味深かった。千葉県には白浜や勝浦など紀伊半島にある地名と同じ地名があるが、あるいは関係があるかもしれない。また、白里町について、「百」から一引くと数字では九十九、漢字では「白」になり、「白里」は「九十九里」の意味である、という宍倉正展氏からのお話にも、「へえ」と納得した。バスの中でたくさんの教養を付ける事ができたのだ。

バスが誕生寺に着くと、寺の門の前にある蓮華潭湧現の宝塔について羽鳥先生が説明をして下さった。元禄の津波によりさらわれたが、明治になり海底から引き上げられたとの事であり、保存状態としてはあまりよくなかった。

誕生寺の宝物館を見学し昼食をとった後、千倉町に移動し海岸段丘を見学した。宍倉氏のご説明により、小さい大正タイプの段と大きい元禄タイプの段の

違いをはっきりと見る事が出来た。ふだん何気なく見ていた汀線付近の岩場も実は大正地震の痕跡であり、また岩場付近の平地も実は元禄地震の痕跡であると考え、なんと雄大な話である。やはり現実のものを見るのが一番である。

さて、巡検は時間の都合上これにて終了となった。館山駅で次の電車まで少し時間があつたので、地震博の最終日の展示が行われていた安房博物館を見学された方も多かった。私、都司先生、中村操氏は千倉駅からタクシーに乗り、この海岸段丘を上から見る事ができる丸山町峰山別荘地へ向かった。宍倉氏のご説明の後であつたので、非常に明瞭に元禄タイプの段丘を確認する事ができた。今回時間の都合で皆様が見ることが出来なかつたのが残念である。

§4. おわりに

総じて、今回の研究会及び巡検で、私は本当に多くの財産を手に入れる事ができた。実り多い今回の会を開催するにあたり、多大な準備が必要であつた事は言うまでもない。準備や運営に関わられた皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(追記)

実は2日目の市民講演会の後、帰りのバスが来るまで時間があつたので私と都司先生と西村裕一先生で近くにある津波碑(溺鬼供養塔)を探しに行ったのだが、途中で迷子になり近くの八百屋さんに道を尋ねたのである。ところが、彼らは津波碑の存在を知らないというのだ。結局、津波碑はその八百屋さんから200m位の所にあつたのだが、そんなに近いのにその存在を知らないとは、元禄の津波も現地では風化しているのだなあとしみじみ思つたのであつた。

